

樽本照雄 著

林紓研究論集

清末小説研究会

林紓研究論集

樽本照雄 著

清末小説研究会

林紓研究論集

目 次

阿英による林紘冤罪事件——『吟辺燕語』序をめぐって……………	7
林訳批判のきっかけ／『吟辺燕語』の原作／『吟辺燕語』	
のこと／林序について／阿英の林紘批判——もうひとつの	
冤罪事件／戯曲と小説／「区別がつかない」論は成立する	
か／複数の版本／結論	
林訳「ハムレット」——『吟辺燕語』から……………	40
林訳「ハムレット」／林紘と周作人／林訳「ハムレット」	
のつづき／林紘の誤訳／結論	
ラム版『シェイクスピア物語』最初の漢訳と林訳……………	53
——「十二夜」を中心に	
阿英の説明／大系版『滌外奇譚』／ラム版「十二夜」の漢	
訳２種／結論	
林訳シェイクスピア——クイラー＝クーチ版「ジュリアス・シーザー」……………	81
Qの英文小説化本／第１回／第２回／第３回／結論	
林訳チャーサー……………	102
馬泰来の指摘／クラーク1947年版のばあい／クラーク版以	
外／クラーク版のばあい／林訳の具体例「死口能歌」	
林訳ユゴー……………	122
林訳ユゴー／鄭振鐸の林訳批判／ユゴー英訳要約版の追求	
／メギエ要約版と林訳／要約版のさらなる追求／チャンド	
ラー要約版／林訳ユゴーの底本／要約版を底本にすること	
の是非	
中国現代文学史における林紘の位置……………	148
1 林紘再評価の論文 150	
2 文学史の記述 154	
3 風説風聞について 255	
4 結 論 266	

林紓落魄伝説	271
林紓落魄説／いくつかの中傷／林紓へのあらたな中傷／林 紓の原稿料あるいは経済的基盤／北京大学図書館における 毛沢東の給料／林紓の揮毫料金	
陳独秀の北京大学罷免——『林紓冤罪事件簿』補遺	294
1 北京大学をめぐるウワサが事実になるとき 294	
2 北京大学改組と陳独秀の罷免 313	
3 林紓の皮肉 324	
周作人が魯迅を回想して林紓に言及する	344
——日本語訳注釈について	
周作人と松枝茂夫の往復書簡／松枝茂夫の質問と周作人の 回答／松枝茂夫の翻訳と注釈／小川利康の注釈／結論	
『林紓冤罪事件簿』ができるまで	356
——あるいは発想と研究方法について	
林紓翻訳に対する批判／「林紓を罵る快樂」／林訳シェイ クスピア／前段階「小説化本」／後段階「歴史劇」／原本 入手の手順／林訳シェイクスピアのばあい／林訳イブセン のばあい／より大きな問題——林紓冤罪事件の全体構造／ 研究体制／一瞬の判断／研究の理解度	
あとがき	393
索引	399

凡 例

- 1 書名の角書、副題は、本書での初出のみ記し、以下は省略する。
- 2 旧暦は漢数字で、新暦はアラビア数字でしめす。
例：宣統二年九月十九日（1910. 10. 21）
ただし、引用文はこの限りではない。
- 3 記号は以下のとおり。
『 』 雑誌、新聞、単行本（書名）、全集
「 」 論文、雑誌掲載、あるいは単行本中の個別作品、作品名一般、叢書名
[] 原文と翻訳文の区別がつきにくいばあい、使用することがある。また筆者の注
- 4 漢語文献に使用される記号は、そのままを引用する。ただし、簡化字は使わない。
日本語漢字にかえる。
- 5 カッコ類は、引用文のなかでも原文のままである。例：「○○「○」○」とし、
「○○『○』○」と書き換えない。
- 6 私の主な著書についての書誌は以下のとおり。注などにおいては書名だけをかかげ、
くりかえさない。
『清末小説閑談』大阪経済大学研究叢書XI 法律文化社1983. 9. 20
『清末小説論集』大阪経済大学研究叢書第20冊 法律文化社1992. 2. 20
『清末小説探索』大阪経済大学研究叢書第34冊 法律文化社1998. 9. 20
『清末小説叢考』大阪経済大学研究叢書第45冊 汲古書院2003. 7
『初期商務印書館研究（増補版）』清末小説研究会2004. 5. 1
『漢訳アラビアン・ナイト論集』清末小説研究会2006. 6. 1
『漢訳ホームズ論集』大阪経済大学研究叢書第52冊 汲古書院2006. 9
『商務印書館研究論集』清末小説研究会2006. 12. 15
『清末翻訳小説論集』清末小説研究会2007. 5. 1
『林紓冤罪事件簿』清末小説研究会2008. 3. 31

阿英による林紘冤罪事件

——『吟辺燕語』序をめぐって

阿英は、林紘＋魏易共訳『吟辺燕語』について何を書いたか。

本稿は、阿英が行なったその説明を問題にする。それは、林紘がシェイクスピア戯曲とラム小説をどう把握していたかについて考えることになる。

阿英が、林訳について説明したわずかな語句にすぎない。だが、林紘のシェイクスピア理解の根幹にふれるものなのだ。

阿英の記述は、林紘に関連する別の誤解を生みだした。のちの研究者は、学界の権威阿英の文章に思考が束縛されてしまう。誤りが阿英からはじまり、現在に継承される。

林紘に関する阿英の誤解は、どういう文脈から生まれたのか。過去を追究していくと、阿英の前にいる人が必然的に姿をあらわす。彼らは、いかにして林紘に濡れ衣をきせたのか。そこに行きつく。

本稿で扱うのは、『吟辺燕語』の林序そのもの、および阿英の短い説明が主となる。あわせて、劉半農、鄭振鐸による有名なある断言を検討し、『滌外奇譚』の叙例、王国維の論文などに言及する。

ラム姉弟作品の漢訳２種類から話をはじめよう。

青少年のためにシェイクスピア原作の戯曲を小説に書き直したものがある。ラム姉弟 (Charles Lamb, Mary Lamb) 『シェイクスピア物語 TALES FROM SHAKESPEARE』(1807) は、そのなかのひとつだ。あまりにも当たり前のことを書いているように思われるだろう。「そのなかのひとつ」という箇所にご留意いただきたい。

中国におけるラム版最初の漢訳は、『滌外奇譚』(達文社1903) をあげなければ

ならない。私は、説明を必要としない周知の事実だと思っていた。だが、中国話劇研究を専門にする日本の研究者でそれを知らない人がいることを知って少し驚いた。当時の中国で、いくら普及しなかった翻訳だったとはいえ、それを現代の研究者が知らないでいい理由にすることはできない。該書に言及する目録、翻訳文学史が、普通に刊行されているからだ。

ラム版の全訳は、林紘が魏易と共同で漢訳した『吟辺燕語』(1904)である。

今では常識となっている事実だ。しかし、林訳が発表された当時の中国では、ラムの原作だとは必ずしも認識されてはいなかった。1904年当時どころか1927年の序がついている『訳書経眼録』*1(出版は1934年)は、『吟辺燕語』を紹介しながらラムの存在にはまったく触れないのである。

林訳そのものを見ても、ラムは出てこない。林紘は、明記しなかった。シェイクスピア作品だといひながら、翻訳は小説体になっている。これが文学革命派によって林紘批判の根拠とされた。

今からはるか昔にさかのぼらなくてはならない。しかも、それに加えて阿英によってある断定がなされた(本稿の主題だ)。

その結果、林紘はシェイクスピアについて何も知らない、と今も非難の声が続いている。林紘は、200種をこえる翻訳書を刊行した中国の知識人だ。その林紘が、シェイクスピア戯曲を知らないとは信じがたい。だが、阿英はそう主張して林紘を罵るのである。

林訳批判のきっかけ

文学革命が提唱される過程において、林紘の姿はもとからほとんど影も形もなかった。

1917年、胡適は、林紘が書いた論文に言及した。だが、その内容には大いに失望したことを表明している。つまり、敵としては資格が十分ではないと林紘について胡適は判断したのだ。ところが、それから1年足らずして、突然、林紘は文学革命派から反対派の代表として名指しされ痛罵されることになる。

1918年、林紘を「旧文人」の代表者に指名して批判を加えたのが、銭玄同と劉半農のふたりだった。文学革命派がしかけた「なれあいの芝居(手紙)」である。

銭玄同が変装して登場し、劉半農がそれをやり込めるという配役だ。

銭玄同は、王敬軒という偽名を使い、林紓を擁護する風を装って『新青年』に手紙を寄せた（形にする）。該誌第4巻第3号（1918.3.15）の「文学革命之反響」欄に掲載された。それに対して劉半農がいちいち反論する。これが筋立てである。題名は、最初つけられていないから「答覆王敬軒先生」などとよばれる。

偽名の書簡を捏造したのは理由はあった。有名な話で、しかも誰も疑わない。

胡適、陳独秀あるいは銭玄同らが主張する文学革命に対して、言論界ではなんの反応もなかった。仲間内の雑誌では文学革命を主張し威勢のいい論文が発表される。だが、それに対してもとからの文人たちは無視して反論してこない。文学革命派はしびれを切らしてひと芝居うった。これが実際にあったいきさつである。

銭玄同は、守旧派であればこう主張するだろうと考える論理を勝手に組み立てた。主張する人間の実態が存在しない。問いただされたばあいは答えようがない。ゆえに、実名で発表するわけにはいかないから王敬軒をでっち上げた。私は、これを指して捏造論文、あるいは捏造書簡と表現している。普通に考えて正々堂々と胸を張って言明できる種類の文章ではありえない。事実、銭玄同は、王敬軒が自分であると公的に認めたことはないのだ。ただし、のちの中国現代文学史では、称賛すべき行為だという評価で一致している。後世の研究者は当事者ではないから当たり前にせよ、捏造論文だという後ろめたさは、誰も感じていない（別稿参照）。

銭玄同と劉半農は、守旧派を挑発することを目的にして文章を書いた。事前に打ち合わせている。具体的に批判をするために守旧派の代表者として林紓を特に指名した。王敬軒（銭玄同）は、林紓を「現代の文豪〔当代文豪〕」と持ち上げてみせる。示した作品のひとつが漢訳の『吟辺燕語』だった。

劉半農は、それに反論する。林紓がそれまで行なっていた外国文学の翻訳という仕事を批判して、価値がないという。林紓らが翻訳した『吟辺燕語』について、劉は何をいったか。

本来はイギリスの戯曲だが、林紓は「詩」と「戯」を識別していない、と劉半農は批判した。

その意味は次のようになる。すなわち、『吟辺燕語』は、シェイクスピア（英国莎士比）著と示してあるにもかかわらず、漢訳を見ればそれが小説体である。

ゆえに、もとのシェイクスピア戯曲を勝手に改変したと断定した。「豆と麦の区別もつかない」と常套句を使って林紘を罵る。いうまでもなく、戯曲と小説の区別がつかないという意味だ（以下、「区別がつかない」論と略称）。それほどに林紘は無知蒙昧、愚昧だと批判する。

ところが、この林訳が底本としたのは、ラム姉弟の『シェイクスピア物語』である。戯曲が書き換えられてすでに小説になっている。小説化された原作をそのまま翻訳して『吟辺燕語』が成ったというだけのことだ。林訳が小説体であるのは当然のこと。非難される理由にはならない。

劉半農が、その事実を知らずに林紘を批判する根拠としたのは、どう考えても軽率だった。事前に銭玄同と相談しているから銭もおなじだ。林訳は、原作者を表示してシェイクスピアだとしている。しかし、林紘はラム姉弟の名前をだしていない。これらがからまって非難のうまれる原因であった、ということ是可以する。だが、おかしいことだと私は思う。劉半農の間違いを指摘する人がいない。文学革命派を批判することは、中国においては現在も許されないのだろう。

それとは別に生じる不可解なことは、ラム原作に関する劉半農らの理解なのである。

『吟辺燕語』の刊行は1904年だ。劉が林訳批判の根拠として該作品をあげたのは、1918年のことだった。14年後である。14年という時間は長すぎはしないか。ラム姉弟の原作であることをその間ずっと劉半農は知らなかったのか。

劉は、翻訳家だし当時は北京大学法科預科教員でもある。その彼がラムについて無知であったとは、信じがたい。だいいちラムの原作だと明記している『瀛外奇譚』が1903年に刊行されているではないか。それにも気づかなかったのか。

知っていたのであれば、劉半農は、わざと無視した。林紘がラム版を底本に使ったとはわかっていたが、ラムの名前を出していないことを逆手にとった。劉半農は、それを林紘がシェイクスピアとラムの区別がつかない根拠とした。そうであれば、劉は確信犯だ。そこがはっきりしない。

見る人がみれば、『吟辺燕語』の原作がなにであるかは容易に理解する。ラムの名前がなかろうが、知っている人は知っているのだ。しかも、はるか以前に。それを証明する事実がある。中国に知識人は多い。

『吟辺燕語』の原作

呉宓（1894-1978）は、1911年当時数えて十八歳の学生である。日記の「自修課程」に「Tales from Shakespeare “Tempest”」と記入し、さらに「商務印書館説部叢書の『英国詩人吟辺燕語』は、たぶんこの書を翻訳したものだろう」*2と書いている。

呉宓は、自分の日記にそう記しただけで公表するわけではない。だから、劉半農が『吟辺燕語』の原作をラム姉弟の小説本だと気づかなかったのはしかたがなかった、とはならない。なぜなら、シェイクスピア戯曲について評論文が別に書かれており、林訳『吟辺燕語』を紹介しているからだ。こちら、劉半農の文章より早く公表されている。

東潤「莎氏楽府談」全4章（『太平洋』第1巻第5、6、8、9号1917.7.15、8.15、11.15、1918.1）である。東潤は朱世溱（1896-1988。武漢大学のちに復旦大学教授*3）のこと。呉宓よりもさらに若い。

表題の「莎氏」はシェイクスピアを、「楽府」は戯曲を、「談」は評論を意味する。

朱東潤は、シェイクスピア戯曲を紹介するこの長編評論のなかで次のように書いている。

のちにラム氏がそのあらましを述べて『シェイクスピア物語』とした。わが国の林琴南がそれを翻訳して『吟辺燕語』と称している〔後有林氏述其事述為莎氏楽府本事。吾国林琴南訳之。則稱為吟辺燕語〕。1:2頁

林氏の『吟辺燕語』は、イギリス人ラムの『シェイクスピア物語』という原書から翻訳したものだ〔林氏吟辺燕語訳自英人林穆之莎氏楽府本事原書〕。

2:1頁

「莎氏楽府」は、シェイクスピア戯曲を指している。「本事」とは、辞書的にいえばもとの事跡、事柄を意味する。物語と考えればよい。ここで使われている「莎氏楽府本事」は、すなわちラムの『シェイクスピア物語』である。

朱東潤論文は、1917年に発表された。1918年の劉半農によるいわゆる「なれあい芝居」「自作自演の論争」よりも前に読むことのできる文章なのだ。

劉半農らは、そのことを知らなかったのか。それとも知らぬ顔をしたか。どうしても話がそこに行く。

もし、わざと無視したのであれば、なにがなんでも林紘を引っ張り出して批判の矢面に立たせたかった、ということだ。事実、そうだった。林訳は、シェイクスピア戯曲を勝手に小説化して翻訳した。多くの研究者たちはそう書いて林紘の無知を物笑いにし続ける。劉半農の誤りを指摘して林紘が冤罪であることをいう研究者は、私を除いて今にいたるまで出現していない。

いうまでもなく、劉半農の林訳批判は、間違った根拠のうえに構築されている。『吟辺燕語』を論拠にした劉の林紘批判は、本来が正しくない。ゆえに、それから6年後の鄭振鐸は、そのことにわざと触れない。

鄭は、『吟辺燕語』をあげるかぎり林訳批判が成立しないことを理解していたと思われる。彼は、「却爾斯、蘭為吟辺燕語（Tales from Shakespeare）」と説明してラムと原作を明記し、自分の論文では別の場所に移動させた。これがその証拠だ。

鄭振鐸は、そのかわりになにをしたか。鄭はそ知らぬ顔をし、ひとことの説明も訂正もせず『吟辺燕語』をおろし「凱徹遺事（ジュリアス・シーザー）」など別の林訳シェイクスピア作品にすり替えた。さらに林訳イブセンを掲げる。林紘は原文のすばらしさと風格および重要な対話を完全に消滅させ、まったく別の本にかえてしまった、と批判するのだ。さらに、林紘は小説と戯曲の区別がつかない、と書いて鄭振鐸は林を罵る（「区別がつかない」論である。後述）。驚くほかはない。これを巧妙といわずして何といえばいいのか。その手際があまりにもあざやかだから、私は感心するたびに同じことが書きたくなり、今もそうしている。今後もしそうするだろう。

鄭振鐸が行なった指摘、すなわち「区別がつかない」論は、のちの研究者によって広く認められ支持された。認められた、といっても検証を経ているわけではない。内容を検討した結果、鄭の説に賛成すると書いた研究者はいないのだ。だから、皆は、なにも調べずなにも知らないまま鄭の断定を受け入れた、といわざ



『吟邊燕語』

説部叢書の表記がない（刊年不明。実物未見）。上海図書館編『中国近現代話劇図誌』（上海科学技術文献出版社2008.1）所収。戈宝権の論文「莎士比亚的作品在中国」にも書影が掲げられる。ほかの版本は、『林紘冤罪事件簿』195頁に書影をかかげた。

るをえない。無責任といえば書きすぎか。ともかくその結果、現在も林紘は批判されつづけている。シェイクスピア戯曲を小説化し、戯曲と小説の「区別がつかない」というのが、その大きな理由のひとつだ。

しかし、その批判には根拠がない。英文小説化本が存在していたのだ。林紘らは、それを底本にして漢訳しただけ。鄭振鐸は林紘に濡れ衣をきせた。これが冤罪事件であることは、明白な事実だ。

以上が、阿英が文章を書く前に発生している事柄である。

『吟邊燕語』のこと

『吟邊燕語』の諸版について簡単にのべる。

説部叢書に収録された版本がもとになる。以下のとおり。

『吟邊燕語』 英国莎士比著 林紘、魏易同訳 上海・中国商務印書館 説部叢書第一集第八編 光緒三十(1904)年七月首版／光緒三十二(1906)年四月三版

シェイクスピアの名前だけがある。ラム姉弟の姿は、ない。問題が発生する原因である。

目次と本文には「英国詩人吟辺燕語」と表示される。また「吟」についても表紙は「吟」であるが、本稿では『吟辺燕語』を使用する。

表紙に「神怪小説」とつけ加えられるのは、改組された説部叢書初集以降だ。日本語でいえば「幻想小説」である。中国の研究者のなかには、該訳書が「神怪小説」と称したことをあたかも誤読したかのようという人がある。なにか先入観があるのではないか。私は林紘が誤読したとは思わない。亡霊、幽霊、妖精が出現する作品もある。角書をつけたのが林紘でなければ、版元の商務印書館になるが、幻想小説だと考えたのは不思議ではないのだ。

当時の新聞『中外日報』に上海商務印書館が出版した新書広告が掲載されている。「説部叢書」を大書し、『案中案』『環遊月球』とともに『吟辺燕語』を説明しているのでその部分を引用する。

『中外日報』光緒三十年八月十三日（1904.9.22）（記号は樽本がつけた）

説部叢書／英国詩人吟辺燕語／閩中林琴南先生善訳小説膾炙人口毋待贅言。
今又訳英詩人莎士比筆記。莎為歐洲詩聖其所著述梨園演唱至今勿衰。此為其詩之紀事二凡十則。先生一一為製新名。其目如下。肉券、馴悍、學悞〔誤〕、鑄情、仇金、神合、疊徵、医諧、獄配、鬼詔、環証、女変、林集、礼関〔哄〕、仙猶、珠還、黑瞽、婚詭、情感、颺引。洋装一冊。售價大洋三角五分。

林紘が「イギリス戯曲家シェイクスピア物語〔英詩人莎士比筆記〕」を翻訳した。シェイクスピアは、ヨーロッパのすぐれた戯曲家〔詩聖〕でありその著述は梨園で演じられ今に至るまで衰えない。該書は、その戯曲〔詩〕の物語〔紀事〕20則である、などなど。

原文の「詩人」は今でいう戯曲家だ。ここに見える「紀事」は、「筆記」「記事」と書いても同じ。物語を意味する。戯曲をもとにして書かれた物語だから

『シェイクスピア物語』にはからならない。林紘の「序」に基づいて作られた広告文だとわかる。

この広告を読んだ一般読者は、ラム姉弟の原作であるとは理解しないだろう。シェイクスピアは出てくるが、ラムの名前がないからだ。シェイクスピアの作品そのものだと誤解してもしようがない。これはあくまでも読者の側の問題である。林紘とは関係がないことにご注意いただきたい。

2日後の『中外日報』光緒三十年八月十五日（1904.9.24）に受贈書籍の記事が掲載されている。上記の広告と内容はほとんど同じだが、出版記録資料として引用する。

惠書誌謝○昨承商務印書館惠贈新印說部叢書第一集第八編。英国詩人吟辺燕語一冊。按是書為英詩聖荷〔莎〕士比筆記。凡二十則。情節奇幻。欧洲各国皆演為傳奇。風行遐邇。訳者為閩中林君琴南。林君素以訳小説著名。則是書之声価。不待言矣。書此鳴謝。

「說部叢書」は、最初第一—十集と称していた。のちに改組されて初集という呼称に変更されている。『吟辺燕語』はこれにも組み込まれ、のちには「林訳小説叢書」に収録された。

上海・商務印書館 說部叢書初集第8編 甲辰（1904）年十月初版／1913.6
四版

上海・商務印書館 林訳小説叢書第1編 1914.6

本文は、以上の3種類ともに同一である。組版がまったく同じだから紙型を使用したと理解する。初集第8編では初版を「十月」としている。もとの「七月」とは異なる。重版の際に記述がぶれたらしい。「說部叢書」ではよくあることだ。

そのほか、小本小説版、国難後版などという形で出版されたという（未見）。

のちに阿英編『晚清文学叢鈔』域外文学訳文卷（北京・中華書局1961.9）に収録されている。

ただし、阿英は「(英) 蘭姆^{ラム}著 林紘魏易同訳」と書いて著者名の表示を変えた。つまり、原書の「英国莎士比著」を独自の判断で削除してしまったのだ。なぜこういう勝手なことをするのだろうか。研究者であれば、ここは注をつけるべき箇所である。だが、阿英は、そうしていない。勝手な改変が、のちの誤解を生む原因になる。

記載がそうに変化したのは、阿英「晚清小説目」(『晚清戯曲小説目』上海文藝聯合出版社1954.8/増補版 上海・古典文学出版社1957.9、北京・中華書局1959.5。124頁)にさかのぼる。この阿英目録から「英国莎士比著」がなくなり、「蘭姆」に変更された。阿英にしてみれば、ラムを表示するほうが正確であると考えたのだろう。しかし、実物には存在しないこの記述は不正確である、といわなければならない。

ここでも誤記のはじまりは、阿英だ。

阿英の「晚清小説目」は、長年にわたって研究者に利用され続けてきた。もとの目録が誤っていれば、誤解が訂正されないままになるのもしかたがない。なにしろ清末小説資料については、利用できるものは限られていると信じられてきたからだ。阿英が整理した資料に依拠せざるをえなかった。

『吟辺燕語』は、1981年に「林訳小説叢書」10種の1冊として北京・商務印書館から復刻刊行される。ここでも「蘭姆」だけがあって、シェイクスピアはない。表紙、扉、奥付(英文併記)のすべてが「[英] 蘭姆著」と書かれている。原本の記載とは異なった説明が行なわれた。また、『中国近代文学大系』11集28巻翻訳文学集三(上海書店1991.4)に採録されたのは、全20篇のうちの3篇だ。同じく「蘭姆」とだけ表示する。

林訳では存在しなかったラムが表にでてくるのは、阿英目録の記述からはじまった。彼に権威があることを私たちに見せつけている。その例のひとつだ。

気の毒にも、1981年復刻版の誤った記述を鵜呑みにした研究者がいる。

莊浩然は、「閩籍近代学者与莎士比亜」(『福建師範大学学報(哲学社会科学版)』2005年第3期(総第132期)2005.5.28)において、次のように説明する。

「林訳本は、ラム氏ふたりの『シェイクスピア物語["Tales from Shakespeare(莎氏楽府本事)"]』を翻訳したと明記し」(74頁)ている、と。